

国際ダイオキシン会議に参加して

分析研究科 山本 央

平成19年9月3日から9月7日の5日間にわたり、残留性有機汚染物質（POPs：Persistent Organic Pollutants）による環境汚染問題を討議する『ダイオキシン2007国際会議』が東京において開催されました。この会議では環境中への残留性や生物蓄積性が高く、毒性や有害性の強いPOPsの廃絶や削減を進めるために世界各国で行われている取り組みが毎年報告され、今年で27回目となります。今年の世界43カ国約1,000名の研究者から750件を超える発表が行われ、化学、医学、薬学、疫学、環境科学、環境工学など幅広い分野から最新の研究報告と活発な議論が交わされました。

当研究所からは2名が参加し、2テーマについてポスター発表を行いました。ここでは私の報告した「底質への高濃度塩素添加時におけるダイオキシン類生成」について紹介するとともに、会議全体を通じた感想を報告したいと思います。

この研究は、ダイオキシン類による土壌や底質の汚染を引き起こす一因として、殺菌のために行われている塩素添加の事例をとりあげたもので、有機分が豊富に含まれる底質などに塩素を添加することで容易にダイオキシン類が生成され、特徴的な同族体/異性体パターンが作られることを見出だした研究です。東京都内では近年土壌や底質から数多くの高濃度汚染が見つかっており、これら汚染が持つ特徴は今回の研究の結果と類似する点が多いことが分かっています。土壌汚染に関する同様な研究は海外の幾つかの研究チームからも報告され、大いに参考になるとともに、近年顕在化するこうした汚染の実態把握や汚染原因解明から浄化・修復を含めた問題は世界共通の課題であることを強く感じました。

また、会議では油症事件や枯葉剤による人体への暴露影響と長期的な疫学調査結果の報告や、ストックホルム条約の新規候補物質であるフッ素系の界面活性剤や臭素系難燃剤についても多くの研究報告が見られました。その他にも、ダイオキシン類の対策が進む日本を含む先進国に対し、途上国の多くでは現状把握すら遅れており、対策の実施が課題となっている状況が数多く報告されていました。

開催期間中にはサテライトシンポジウムや各種セミナー、都庁展望台での夕食会なども開かれ、多くの研究者と交流する機会を持ち、非常に刺激を受けた5日間でした。今回の学会参加を通じて、日本の研究レベルの高さを再認識しましたが、一方で研究の方向性やテーマ設定の視点、グローバルな研究体制という観点では他の国々の研究も非常にレベルの高いものでした。今後もこうした機会を活用して情報を集め、幅広い視野で研究に取り組んでいきたいと思えます。



海外の研究者との記念撮影（右から二人目が筆者）